

日本人の性行動の経時的変化

Longitudinal changes of sexual behavior in Japan

赤川学¹、小西祥子¹、仮屋ふみ子¹、森木美恵²

Manabu Akagawa, Shoko Konishi, Fumiko Kariya, Yoshie Moriki

1 東京大学 The University of Tokyo,

2 国際基督教大学 International Christian University

koko205p@gmail.com (赤川学)

【問題意識】日本人の性行動（セックス頻度、オナニー [マスターベーション] 頻度）の活発さは、新たなメディアや SNS などの技術革新に伴って変化するとともに、全体の妊孕力・出生率に対しても少なからぬ影響を与えられよう。

日本人のセックス頻度に関しては、朝山(1949)、篠崎(1953)、共同通信「現代と性」委員会(1984)、NHK「日本人の性」プロジェクト(2002)、林(2018)などによる調査結果がある。佐藤(2019)は、これらの性行動調査の結果を振り返りつつ、性交開始の遷延、未婚者の性交経験割合低下、セックスレス・カップルの割合上昇という「セックス離れ」傾向が存在すると指摘している。

本報告では、小西祥子が代表となって 2020 年 10 月に実施した「男性の妊孕力に関する調査」(20-54 歳の男性 4000 名を対象としたオンライン調査)をもとに、成年男性のセックス・オナニー頻度に経時的な変化、具体的には「セックス離れ」と呼びうるような傾向が生じているか否かを確認する。

【方法】これまでの性行動調査は、仮に無作為抽出に基づくものであったとしても、1 時点のワンショットサーベイであることが多かった。本調査は、無作為抽出ではないにせよ、年齢・居住地域による層化を行なった上で、2020 年以降のコロナ禍による影響を受けていない、2019 年における平均的なセックス・オナニー頻度（これらを行った年間日数）を計測した。

さらに 5 年前(2014 年)、10 年前(2009 年)、20 年前(1999 年)の頻度を回顧的に尋ねた。これにより、1 回のワンショットサーベイでありながら、同一コホートにおけるセックス・オナニー頻度の経年的な変化だけでなく、同一年齢集団（10 歳刻み、20～50 代）におけるトレンドの変化を比較検討できるようになった。

【結果と考察】

得られた知見は以下の通りである。

第一に、同一年齢集団（10 歳刻み、20～50 代）におけるセックス頻度は、20 代、30 代、40 代ともに減少している。20 代では、1999 年から順に mean=68 [回] (s. d. =88)、mean=61 (s. d. =89)、mean=55 (s. d. =85) と推移し、2019 年には mean=61 (s. d. =89) と減少する。30 代でも同様の傾向があり、1999 年から順に mean=70 [回] (s. d. =83)、mean=54 (s. d. =72)、mean=49 (s. d. =72) と推移し、2019 年には mean=39 (s. d. =67) と、20 年前に比べて大きく減少している。40 代にも同様の傾向がみられる。ここから、佐藤龍三郎が指摘するような

「セックス離れ」の傾向が明らかに確認できる。

第二に、同一年齢集団（10 歳刻み、20－50 代）におけるオナニー頻度に関しては、各年代ともに大きな減少傾向はみられない。逆に 30 代では、1999 年から順に mean=123 [回] (s. d. =122)、mean=135 (s. d. =115)、mean=139 (s. d. =115) と推移し、2019 年には mean=141 (s. d. =115) と、20 年前に比べて増加傾向が確認される。「セックス離れ」とは逆の、「オナニー依存 (?)」というべき傾向がみられる。

当日の報告では、これらの結果をもとに、(1) セックスとオナニーは相乗的な関係か、それとも相克的な関係か、(2) 男性の「セックス離れ」と「オナニー依存 (?)」という傾向は、最終的には妊孕力につながる「精液の行方」に対して、どのような影響をもたらすかといった論点を検討したい。

【引用文献】

朝山新一，1949，『現代学生の性行動』臼井書房。

林雄亮編，2018，『青少年の性行動はどう変わってきたか』ミネルヴァ書房。

共同通信「現代と性」委員会，1984，『日本人の性』文藝春秋社。

NHK「日本人の性」プロジェクト，2002，『データブック NHK 日本人の性行動・性意識』日本放送出版協会。

佐藤龍三郎，2019，「少子化とセクシュアリティ」『中央大学経済研究所年報』No. 51, pp. 109-133.

篠崎信男，1953，『日本人の性生活』文芸出版社。